

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士）

金屋光彦

いじめ考 その2

—いじめは関係の病、親しい仲でこそ生まれる—

1 いじめに対する子どもたちの反応

いじめは、人間関係の病である。身体の病で腹痛や発熱のような症状が出た時、私たちはまず周囲に訴え、病院へ行く。そしてドクターという専門家に診断してもらい、元の健康な身体に戻るよう治療を願い出る。

ところが、いじめは違う。文科省の調査から、全国の小・中・高校における「いじめ発見のきっかけ」を見ると、「本人からの訴え」はわずか16.8%に過ぎない（平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」）。いじめに遭っている子どもたちは、激しい苦痛に一人で耐えている。その苦痛が限界を超えた時、孤立と絶望の中で自ら命を絶つのだ。

「俺だってまだ死にたくない。だけどこのままじゃ『生きジゴク』になっちゃうよ。ただ俺が死んだからって他のヤツが犠牲になっちゃたんじゃ意味ないじゃないか。だから君達もバカな事をするのはやめてくれ。最後のお願いだ」

2月の寒い朝、岩手県盛岡市駅前デパートの地下トイレで、東京都中野区の中学2年生鹿川裕史君が自殺した。その床に遺されていたのが、以上の文面だった。

鹿川くんは、2年に進級した頃から、同級生らから執拗ないじめを受けていた。使い走りをはじめ、校庭で大声で歌うことの強要、顔へのいたずら書き、そして、いじめグループは、彼の「葬式ごっこ」を思いつく。

彼の座る机には、遺影の写真と牛乳瓶の花と線香があり、『さようなら鹿川君』と記された色紙には、教師らも寄せ書きしたという。エスカレートしながら執拗に続たいじめに対して、鹿川君はいつも笑っていたという。彼は、なぜ笑っていたのか？ なぜ声をあげなかったのだろうか？ 彼は、笑うしかなかったのだ。クラスに居続け学校生活を続けていくには、いじめに調子を合わせていくしか、なすすべがなかったのだと思う。

2 いじめは親しい仲間や友人関係で発生する

いじめの危険なところは、親しい間でこそ発生するところだ。森田洋司大阪府立大学名誉教授の調査によれば、いじめが発生するのは「よく遊ぶ友達」との間で発生するのが最も多く、「ときどき話す友達」が2番目に多く、両方を足すと8割を超える。いじめが発生する前は、きわめて親密か、仲が良かった関係が大多数なのである。

私が勤務する高校で、突然男子生徒が休み始めた。支

援する途中で明らかになったのは、仲間の同級生からのいじり行為に耐え切れず、学校へ来られなくなった事実である。いじめたほうの生徒たちに話を聞くと、「あいつも楽しそうにしていたのに」、「いじめだなんて、思ってもみなかった」等と語り、どんなに本人が辛い思いをしていたか、全く気づいていないのである。

また、別の学校で起こったいじめは、入学以来仲が良かった4人の同級生のケースである。周囲のクラスメートも先生方も彼らは仲良しと思っていた。ところが、2学期のある時期を境にどうも関係がいびつで、一人がいじめられていることに周囲が気づき、破綻を招く前に、その関係が明らかになって解決に至ったことがあった。いじめに遭っていた男子生徒は、「あいつら度が過ぎてい

るんですよ」と面談でその悔しさを語ってくれた。仲間の一員でいることに居場所と意味を得ている限り、仲間からの苦痛ないじりに耐えるしかないことは、想像に難しくない。欠席や不登校という手段で回避することもできようが、それでは著しく不利益になる。また、先生や保護者に助けを求めることもできようが、仲間を大人に売る行為を潔しとしない意識も強く、このことで仲間関係が壊れ、離脱せざるをえなくなるのも怖い。疾風怒濤の時代を生きる彼らは、さまざまな思いに揺さぶられながら、仲間のいじめに耐え続けるのである。

3 いじめは関係の病

いじめは人間関係の病である。被害者は、激しい痛みを感じている。しかし、強い立場の加害者は、その痛みの本当のところはわからない。周囲も気づかないまま、いじめは次第にエスカレートし、苦痛に耐えかね限界を超えた被害者は、自ら命を絶つことで、ようやくいびつな関係が判明し、終わりを迎えられるのだ。

繰り返すが、いじめは病である。身体の病は、ドクターに助けを求めてよいように、いじめという病に陥り、自分や周囲の力で解決できない時は、いつでも専門家に頼ってよいのだ。

そのことを、私は全員面接の席で、子どもたちに話している。昨年から東京都が始めた全員面接。都内の公立小・中・高校の全校で実施中である。子どもたちは一樣にうなづき、集中し真剣に聴いている。中には、涙ぐむ生徒もいる。その赤裸裸で真摯な彼らの姿は、それまでの学校生活の中で、いじめを受け心から苦しんだ経験があることを、如実に示している。